

北方資料室所蔵資料展

北海道みなと物語

～築港の軌跡を辿る～



期日：平成 20 年 12 月 27 日（土）

～平成 21 年 2 月 26 日（木）

場所：北方資料展示コーナー

はじめに

函館港は、安政 6（1859）年、日米修好通商条約の締結により、横浜・長崎とともにわが国最初の貿易港として開港し、平成 21（2009）年に 150 周年を迎えます。これにちなみ、函館市では記念行事が予定されています。

一方、金融危機に端を発した景気後退により、フェリーの北海道航路からの撤退や、貿易輸出入額の減少など、北海道の港湾にとっても厳しい情勢となってきました。

港湾は物流の拠点であり、北海道経済の要と言えます。港湾建設当時の先人たちの熱意や苦労を振り返り、北海道の港湾の原点を見つめなおす機会となれば幸いです。

【 目 次 】

はじめに	1
1 近代港湾建設の礎	2～4
2 港づくりに尽力した技術者たち	5～8
3 築港の沿革 その1 北海道・網走・小樽・釧路・函館・留萌・稚内	9～11
4 築港の沿革 その2 石狩・十勝・苫小牧・根室・室蘭・紋別	12～14

I 近代港湾建設の礎

北海道は、周囲を海に囲まれ、早くから漁業や交易のための港が開かれていました。しかし、それらは自然の地形を利用した小規模なものに過ぎませんでした。

明治に入り、北海道開拓のための移民や物資の受入れの必要性から、港湾の整備が主要な課題となりました。しかし、本格的に築港が開始されたのは北海道庁期に入ってからのことでした。

明治 20 (1887) 年、C・S・メークが、お雇い外国人として三年契約で北海道庁に招かれ、道庁技師福士成豊らとともに北海道沿岸を巡り、近代港湾としての適正調査や整備計画立案（築港設計）を行いました。主な調査対象は、室蘭・浦河・釧路・厚岸・浜中（霧多布）・花咲・根室・網走・佐呂間・留萌・増毛・石狩（石狩川河口）・小樽・岩内・寿都・瀬棚・熊石・江差・福山（松前）・函館・砂原・森など、ほぼ全道に及び、この結果は「北海道各港調査報文」としてまとめられ、後の北海道の港湾整備に大きな役割を果たしました。

- 1 「北海道の港湾・海岸に関する調査報告書 明治 20 年～23 年 今でも生きている 100 年前の港湾計画」

(シー・エス・メーク／著 寒地港湾技術研究センター 1994 483p 30cm 683.9/ME)

※ () 内は、書名・著者名・出版者等・ページ数・大きさ・請求記号

- 2 「Reports on the Hokkaido harbours」

(Meik C.S.／著 Sapporo Hokkaidocho 1887 27cm 683.9/ME) ※ 2 巻もあり

- 3 「〔福士成豊調査日誌〕自明治 20 年 6 月至明治 23 年」

(福士成豊／著 〔出版地不明〕〔出版者不明〕 1916 1 冊 12×19cm 318.2/F)

C・S・メーク (1853～1923)

イギリス人の港湾技師。港湾築設を業務とするメーク・サンズ商会で、技術者として重きをなしていたが、北海道の港湾を近代的施設につくりあげようとしていた政府の招きにより、港湾技師長として来日した。2 年半にわたって北海道全域の港湾調査・築港設計を実施した。

メークの基礎調査の下、技師広井勇（詳しくは 5p 参照）の手により、明治 23（1890）年以降、より詳細な調査と設計がなされることとなりました。広井勇の監督のもと、29 年から函館改良工事に着手、32 年ほぼ完成、30 年から小樽港築港に着手、41 年に完成しました。

- 4 「築港 前編」（広井勇／著 改訂増補 丸善 1924 488p 23cm 518/HI/1）
※ 後編もあり
- 5 「小樽港修築設計書・小樽港修築工事方法書・小樽港修築工費収支予算書」
（〔出版地不明〕〔出版者不明〕 1903 27p 19cm 518.1/0）
- 6 「小樽築港工事報文 前編」
（北海道／編 〔小樽港湾建設事務所〕 1987 1冊 22cm 518.2/H0/1）
※ 復刻版 元の発行所：北海道、元の刊年：明治 41 年、広井勇による
- 7 「小樽築港工事報文 後編」
（北海道／編 〔小樽港湾建設事務所〕 1987 1冊 22cm 518.2/H0/2）
※ 復刻版 元の発行所：北海道、元の刊年：大正 13 年、広井勇による
- 8 「釧路港調査報文〔2〕 明治 41 年」
（〔出版地不明〕〔出版者不明〕 1908 1冊 26 cm 518.1/KU/M41）
※ 広井勇による
- 9 「函館港湾調査報文」（北海道／編 北海道 1894 21, 16p 22cm 683.9/H0）
※ 広井勇による

日露戦争後の国力充実の必要性から、政府は明治 43（1910）年から、新たに 15 カ年計画を実施することとなりました。いわゆる第一期拓殖計画（明治 43—昭和元年度）です。

第一期拓殖計画期は工業が急速に発展し、物資流通のために、港湾整備が重点的にとりあげられ、拓殖費の 22%を占める巨額な投資が行われました。この時期に、商港として函館・小樽・釧路・留萌・室蘭・網走・稚内・根室の各港が、また、漁港として紋別港が修築されました。

また、昭和 2（1927）年から始まる第二期拓殖計画（昭和 2—21 年度）では、第一期計画に引き続き、8 商港の修築と防波堤の築設が進められました。

- 10 「北海道第一期拓殖計画事業報文」
(北海道／編 北海道 1931 515, 159p 27cm 333.9/H0)
- 11 「北海道第二期拓殖計画実施概要 下 (自昭和2年度 至昭和8年度)」
(北海道／編 北海道 1935 22cm 333.9/H0/2) ※ 下に港湾の項あり
- 12 「網走築港調査書」(北見産業館／編 北見産業館 1914 132p 22cm 518.2/KI)
- 13 「函館築港工事報文」(北海道／編 北海道 1919 184, 28p 23cm 518.2/H0)
- 14 「紋別港修築計画ノ概要」(北海道／編 北海道 1923 1枚 40×54cm 518.1/H0)

現在、北海道には、多くの港がありますが、次のように分けられています。

- <特定重要港湾> 国際海上輸送網の拠点として特に重要な港湾として政令で定められた港湾。室蘭港と苫小牧港。
- <重要港湾> 国際海上輸送網または国内海上輸送網の拠点となる港湾その他の国の利害に重大な関係を有する港湾として政令で定められた港湾。函館港・小樽港・釧路港・留萌港・稚内港・十勝港・石狩湾新港・紋別港・網走港・根室港。
- <地方港湾> 重要港湾以外の港湾。道内には23港。
- <56条港湾> 港湾区域の定めのない港湾で、港湾法第56条に基づき、都道府県知事が水域を公告した港湾。道内には6港。

詳しくは、こちらのHPをご参照ください！

北海道庁建設部建設管理局建設政策課

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kn/kks/kkw/contents/port/minato/minatotop.htm>

国土交通省北海道開発局

http://www.hkd.mlit.go.jp/zigyoka/z_kowan/bayport/profile/index.html

Ⅱ 港づくりに尽力した技術者たち

北海道における港づくりは、荒海に挑む過酷なものでした。しかし、身を挺して難行に従事した技術者たちの姿がありました。彼らは、海外の知識や技術を学び、築港には最新の技術が用いられ、世界的にも高く評価されたものが少なくありません。北海道のみならず日本の港湾の発展の影には、彼らの英知と努力を垣間見ることができるのです。

【 広井 勇 】(ひろい いさみ : 1862~1928)

橋梁学、築港学の権威。札幌農学校卒業後（第2期生）、外国に留学し、土木工学の研鑽を積んだ。札幌農学校教授を経て東京帝国大学教授。この間に北海道庁技師を兼ね、小樽築をはじめ函館、室蘭、釧路など、北海道重要港湾について近代的築港の礎を築いた。

- 1 「山に向かいて目を挙ぐ 工学博士・広井勇の生涯」
(高崎 哲郎／著 鹿島出版会 2003 281p 20cm 289/HI)
- 2 「工学博士広井勇伝」
(広井工学博士記念事業会／編 工事書報社 1940 236p 23cm 289/HI)
- 3 「広井勇君之小伝」
(宮部 金吾／著 北海道大学札幌同窓会 1928 18p 23cm 289/HI)
- 4 「札幌農学校」(蝦名賢造／著 新評論 1991 458p 22cm 377.28/E)
- 5 「小樽港民」
(廣井勇・伊藤長右衛門両先生胸像帰還実行委員会／編 [出版地不明]
廣井勇・伊藤長右衛門両先生胸像帰還実行委員会 1999 91p 26cm 518.2/0)
- 6 「海と港 No. 12」(寒地港湾技術研究センター 1995.11.30 雑誌)
『北海道の港湾・治水の原点 広井勇とその弟子岡崎文吉』
- 7 「みなとの偉人たち」
(みなとの偉人研究会／著 ウェイツ 2008 254p 21cm 683.921/MI)

【 岡崎 文吉 】(おかざき ぶんきち : 1872~1945)

石狩川ほか治水工事の先駆者。札幌農学校工科卒業と同時に母校の助教授兼北海道庁技師となる。その後、道庁専任技師となり石狩川治水に従事し、治水事務所長、工事事務所長を歴任。また、北海道で最初の鋼橋である豊平橋の設計、函館港の調査など幅広く北海道の開発に貢献する。

8 「石狩川治水の祖岡崎文吉」

(北海道河川防災研究センター／企画 北海道開発局石狩川開発建設部 1992
[22] p 30cm 289/0)

9 「流水の科学者岡崎文吉」

(浅田 英祺／著 北海道大学図書刊行会 1994 763, 12p 23cm 289/0)

10 「海と港 No. 12」(寒地港湾技術研究センター 1995. 11. 30 雑誌)

『北海道の港湾・治水の原点 広井勇とその弟子岡崎文吉』

【 福士 成豊 】(ふくし なりとよ : 1838~1922)

箱館の船大工続豊治の五男として生まれ、回船業福士長松の養子となる。実父豊治について造船技術を学び、イギリス人ブラキストンと交際して、測量・機械・測候・博物学を学んだ。開拓使の官吏となり、日本人として初めての本格的な気象観測を行い、三角測量にも従事した。また、イギリス人メークとともに函館港湾調査に従事した。

11 「幕末維新时期における欧米科学技術の摂取について 福士成豊を中心に」

(高倉 新一郎／〔ほか〕執筆 北海道開拓記念館 1986 P45~68 26cm 289/F)

12 「福士成豊関係文献目録」

(幕末維新时期における欧米科学技術の摂取について研究班／編 北海道開拓記念館
1986 289/F)

13 「先駆者と北海道」(黒田孝郎, 遠藤一夫／著 北海道新聞社 1978 278p 19cm
210. 1/KU)

14 「開拓につくした人びと 2 北海道の夜明け」

(北海道総務部文書課／編集 理論社 1978 314, 21p 19cm 281.08/H0/2)

15 「北海道「海」の人国記」(伊藤 孝博／著 無明舎出版 2008 576p 19cm 281/H0)

16 「みなとの偉人たち」
(みなとの偉人研究会／著 ウェイツ 2008 254p 21cm 683.921/M1)

【 伊藤 長右衛門 】(いとう ちょうえもん：1875～1939)

土木技術者。東京帝国大学土木工学科卒業。広井勇教授の薦めで北海道庁に奉職、小樽築港事務所を振り出しに北海道各地の港湾建設に携わる。北海道第2期拓殖計画を通じ道内の重要港湾、地方港湾、大小の漁港さらに当時の樺太の主要港はほとんど伊藤の計画設計になるものである。北海道港湾生みの親は広井勇、育ての親は伊藤長右衛門といわれている。

17 「伊藤長右衛門先生伝」
(中村廉次／編 北海道港湾協会 1964 142p 22cm 289/I)

18 「小樽港民」
(廣井勇・伊藤長右衛門両先生胸像帰還実行委員会／編集 [出版地不明]
廣井勇・伊藤長右衛門両先生胸像帰還実行委員会 1999 91p 26cm 518.2/O)

19 「ホクテックジャーナル Vol. 2」(北海道建設技術センター 2002.9.1 雑誌)

【 青木 政徳 】(あおき せいとく：1863～1900)

土木技術者。琵琶湖疎水工事、北海道炭鉱鉄道新線工事などに携わる。北海道庁にうつり、広井勇の下で小樽港湾調査及び函館港改良工事、小樽築港工事に従事した。

20 「技師青木政徳 小樽築港の礎」
(小沢 栄／著 近藤工業 2006 87p 21cm 518.2/G)

【 斉藤 静脩 】(さいとう せいしゅう：1884～1968)

土木、治水計画の権威。東京帝国大学工学部土木科卒業、北海道庁に勤める。技師として北海道拓殖計画の担い手として数々の治水事業に業績をあげた。

21 「この道五十年」(齊藤 静脩／著 北海道開発局 1967 135p 21cm 289/SA)

22 「北海道回想録」

(北海道総務部文書課／編 北海道 1964 376p 21cm 281/H0)

【 平尾 敏雄 】(ひらお としお : 1892~1958)

東京帝国大学土木工学科で、広井勇の薫陶を受け、北海道庁に入庁。小樽築港事務所長伊藤長右衛門の下で港湾建設の真髄を学ぶ。1920年、網走築港事務所が開設されると、所長に迎えられ網走港防波堤工事建設に従事した。

23 「ホクテックジャーナル Vol. 8」(北海道建設技術センター 2005. 8. 1 雑誌)

【 内田 富吉 】(うちだ とみきち : 1871~)

土木技術者。広井勇に誘われ北海道庁に就職し、青木政徳の後任として小樽築港事務所で小樽築港工事に従事、札幌農学校の講師も兼務し、釧路港や稚内港、留萌港の調査設計も行った。

24 「小樽と大連の港づくりに尽くした技師内田富吉」

(小沢 榮／著 小沢栄 2008 133p 21cm 289/U)

【 五十嵐 億太郎 】(いがらし おくたろう : 1873~1929)

留萌市開発功労者。東京水産伝習所に学び、漁場経営のかたわら、樺太沖漁場の開発に尽くした。留萌の発展のためには港建設が必須であるとし、築港事業誘致に尽力した。

25 「五十嵐億太郎 郷土留萌建設の先覚者」

(近藤清徹／執筆・編集 留萌日日新聞社 1982 158p 19cm 289/I)

26 「北海道「海」の人国記」

(伊藤 孝博／著 無明舎出版 2008 576p 19cm 281/H0)

※ 技術者ではありませんが、留萌港築港の立役者のため、こちらで紹介しました。

Ⅲ 築港の沿革 その1 北海道・網走・小樽・釧路・函館・留萌・稚内

北海道における主要な港湾について、各港の沿革や建設史についての資料を紹介します。

【 北海道 】

- 1 「伸びゆく北のみなと」
(北海道開発局港湾部／編 北海道港湾協会 1982 67p 21×30cm 518.2/H0)
- 2 「北海道港湾建設史」
(北海道開発局港湾部／編 北海道開発協会 1978 869p 27cm 518.2/H0)
- 3 「北海道港湾変遷史」
(中村 廉次／著 北海道港湾変遷史出版後援会 1960 308p 26cm 683.9/NA)
- 4 「北海道のみなと」
(中村 廉次／著 栗林商会東京支店 1961 254p 26cm 683.9/NA)

【 網走港 】

- 5 「網走築港の沿革」(北海道／編 北海道 1919 1枚 40×55cm 518.2/H0)
- 6 「網走港」(貴田国平／編 網走築港期成会 1899 124p 20cm 518.2/KI)
- 7 「網走港修築工事誌」(北海道／編 北海道 1936 17p 22cm 518.2/H0)
- 8 「網走とみなと 写真で綴る網走港史」
(北海道開発協会 1989 142p 31cm 683.9/H0)
- 9 「北のみなと会報 6号」(北海道港湾建設協会 1998.10.1 雑誌)

【 小樽港 】

- 10 「小樽築港工事概要」(北海道／編 北海道 1924 1枚 46×64cm 518.2/H0)
- 11 「小樽港史」(高畑 宣一／著 高畑利宜 1899 218p 23cm 217.22/TA)
- 12 「小樽港湾修築誌」(小樽市／編 小樽市 1924 30p 26cm 518.2/0)
- 13 「写真集 小樽築港 100年のあゆみ」
(寒地港湾技術研究センター／編 小樽港湾建設事務所 1997 135p 31cm
683.9/0)

【 釧路港 】

- 14 「釧路築港物語」(〔釧路築港事務所〕 1999 73p 26cm 683.9/KU)
- 15 「釧路港建設史」
(釧路港湾建設事務所 1998 389p 31cm 518.2/KU)
- 16 「釧路叢書 第30巻 釧路港～港湾形成の過程と背景」
(釧路市／編 釧路市 1994 366p 22cm 081.2/KU/30)
- 17 「釧路築港史 全」
(釧路実業調査会／編 釧路実業調査会 1909 128p 19cm 683.9/KU)
- 18 「最近の釧路港」(釧路市／編 釧路市 1934 36p 23cm 683.9/KU)
- 19 「写真で見る釧路港の変遷」
(釧路作業船整備業協会／編 釧路作業船整備業協会 1986 242p 30cm
683.9/KU)

【 函館港 】

- 20 「函館開港百年のうつりかわり」(函館市 1958 36p 19cm 218.6/HA)
- 21 「函館港みなとづくり百年の歩み」(函館港湾建設事務所 [1997] 683.9/HA)

【 留萌港 】

- 22 「新留萌港史」
(寒地港湾技術研究センター／編集 留萌港湾事務所 2007 270p 30cm
683.9/SH)
- 23 「留萌港大観」(荒潮社／編 荒潮社 1933 277p 22cm 291.46/R)
- 24 「留萌港史」(留萌開発建設部／監修 北海道開発協会 1976 1049p 27cm
683.9/H0)
- 25 「黎明の留萌港 留萌港建設における直営工事の変遷」
(留萌港建設資料監修委員会／監修 留萌港湾建設事務所 2001 178p 30cm
683.9/R)

【 稚内港 】

- 26 「築港要覧」(北海道／編 北海道 1924 53p 図版 24p 22cm 518.2/H0)
- 27 「稚内港 ’61」
(稚内市／編 稚内市 1961 1枚 18×23cm (折りたたみ) P683.9/W/S36)

安政 6 (1859) 年に開港したのは、函館・横浜・長崎の三港とされています。函館・横浜では、ともに平成 21 (2009) 年に開港 150 周年の記念行事を予定しています。しかし、長崎では開港を、元亀 2 (1571) 年、ポルトガル船の寄港地となった時としており、150 周年記念は行われません。

函館開港 150 周年記念事業公式ウェブサイト「ハコダテ 150」
<http://www.hakodate150.com/>

IV 築港の沿革 その2 石狩・十勝・苫小牧・根室・室蘭・紋別

戦後、新しく築港されたのが、苫小牧西・東港と石狩湾新港です。

苫小牧港は、主に工業港を担う西港区と、主に物流基地を担う東港区からなっています。西港区は「第一次北海道総合開発計画」の重要施策として、昭和26（1951）年に着工し、国内初の内陸掘込式港湾として工事が行われ、38年に供用を開始しました。

東港区は、46年に策定された「苫小牧東部大規模工業基地開発基本計画」に沿って整備が進められ、55年に供用を開始しました。しかし、平成7（1995）年に策定された「苫小牧東部開発新計画」において、開発の基本目標が「産・学・住・遊」機能を備えた「複合開発」へ変更されたため、西港区と一体となった流通港湾への機能の転換が求められており、20年8月には、国際コンテナターミナルの東港移転も行われました。

石狩湾新港は、昭和45（1970）年に閣議決定された「第三次北海道総合開発計画」において地域開発の核となる流通港湾として建設が決定されました。48年から本格的に着工し、57年に供用が開始されました。

【 石狩湾新港 】

1 「石狩湾新港建設のあゆみ」

（北海道開発局小樽開発建設部小樽港湾建設事務所／編 小樽港湾建設事務所
1987 154p 31cm 518.1/H0）

2 「石狩湾新港地域開発基本計画」

（北海道開発庁／編 北海道開発庁 1972 18p 26cm 518.1/H0）

3 「石狩湾新港地域開発基本計画」

（北海道開発庁／編 北海道開発庁 1972 18p 26cm 518.1/H0）

4 「石狩湾新港地域開発事業について」

（石狩開発株式会社／編 石狩開発 1971 30p 26cm 518.1/I）

5 「30年のあゆみ」（石狩開発／編 石狩開発 1994 350p 27cm 335.48/I）

【 十勝港 】

- 6 「十勝港建設史」
（寒地港湾技術研究センター／編集 帯広開発建設部 2006 277p 31cm
683.9/T0)
- 7 「十勝港今昔物語」
（十勝港湾建設部／編 十勝港湾建設事務所 1996 11p 30cm P683.9/T0)

【 苫小牧港 】

- 8 「こうして生まれ育った世界初の内陸掘込苫小牧工業港 戦前・戦中・戦後
にわたる苦闘の歴史」(西田信一／著 西田信一 1992 439p 22cm 683.9/N1)
- 9 「苫小牧港史」
（苫小牧市, 苫小牧港管理組合／編 苫小牧市 1982 908p 27cm 683.9/T0)
- 10 「ドキュメント苫小牧港」(木野 工／著 講談社 1973 427p 20cm 916/K1)
- 11 「苫小牧みなと五十年」
（苫小牧港湾建設事務所／〔編〕 苫小牧港湾建設事務所 2001 38p 30cm
518.2/T0)
- 12 「ドキュメント苫小牧港着工以前意外史」
（梅木 馨六／著 〔梅木ミサヲ〕 1995 107p 21cm 518.2/U)

【 苫小牧東港 】

- 13 「苫小牧港東港地区港湾計画資料」
（苫小牧港港湾管理者／編 苫小牧港港湾管理者 1973 94p 26cm 683.9/T0)
- 14 「苫小牧工業港造成計画調査資料 1 工業用地地盤調査」
（北海道開発局局長官房開発調査課／編 北海道開発局局長官房開発調査課 1955
22p 26cm 518.1/H0/1) ※ 6まであり

15 「苫小牧東港建設史」
(寒地港湾技術研究センター／編 北海道開発協会 1992 757p 30cm 683.9/T0)

16 「苫東の二十年」
(苫小牧東部開発／編 苫小牧東部開発 1992 167p 26cm 335.48/T0)

【 根室港 】

17 「根室港 昭和6年版」
(根室町／編 [根室町] 1931 28p 13×19cm P683.9/NE)

18 「根室港建設史」
(寒地港湾技術研究センター／編 釧路開発建設部 2005 287p 31cm 518.2/NE)

19 「北のみなと会報 8号」(北海道港湾建設協会 1989.6.1 雑誌)

【 室蘭港 】

20 「室蘭港修築の沿革」(北海道／編 北海道 [大正] 1枚 40×55cm 518.2/H0)

21 「室蘭港建設史」
(寒地港湾技術研究センター／編 室蘭開発建設部 1999 521p 31cm 518.2/MU)

22 「室蘭港のパイオニア [第1] 室蘭港湾資料 第6集」
(室蘭図書館／編 室蘭図書館 1970 123p 683.9/MU/6) ※ 第10集まであり

23 「明治後期の室蘭港 室蘭港湾資料 第3集」
(室蘭図書館／編 室蘭図書館 1967 82p 22cm 683.9/MU/3)

24 「室蘭みなと風土記」
(中村秀造／編著 [中村秀造] 1992 301p 21cm 683.9/NA)

【 紋別港 】

25 「オホーツクの港もんべつ」
(紋別港湾建設事務所／編 オホーツク設計 1991 334p 31cm 683.9/0)

北方資料室所蔵資料展

北海道みなと物語 ～築港の軌跡を辿る～

発行日：平成 20 年 12 月 27 日

編集：北海道立図書館北方資料部

発行：北海道立図書館

〒069-0834 江別市文京台東町 41

TEL：011-384-8521 FAX：011-386-6906

[http：www.library.pref.hokkaido.jp/](http://www.library.pref.hokkaido.jp/)